

活動報告書

報告者氏名: 熊井戸佳之 所属: 東京都立鹿本学園 記録日: 2015年 2月 12日

【対象児の情報】

・ 学年

高等部3年の女子

・ 障害名 (◎: 主たる障害)

◎肢体不自由

知的障害

構音障害

・ 障害と困難の内容

様々なことに意欲的な生徒で、本校では、「知的障害特別支援学校代替の教育課程」を履修している。漢字の読み書きや計算は、小学校低学年程度の課題に取り組んでいる。

構音に障害があり、慣れた人でも正確に聞き取れず、対象児に聞き返すことがある。対象児は家庭と学校の慣れた環境で生活しているので、自分の構音の問題が、社会に出て1人で行動する時に課題になることには気が付いていない。難聴については、聞き取りにくさがある程度で、日常生活で大きな困難はない。

【活動目的】

・ 当初のねらい

対象児は構音障害があり、慣れた相手との普段の会話であれば通じることが多いが、慣れた相手でも普段とは異なる内容の会話であったり、学校内でも普段接している教員以外が会話の相手だったりすると、話していることが伝わりにくく、何度も繰り返して話す。それでも聞き取ってもらえない時には、言葉を置き換えて伝えようとするなど、対象児は日常生活における言葉でのコミュニケーションに困難を感じている。

現在、学校以外の外部の人と会話する機会はほとんどない。携帯情報端末を自分の課題を解決するための1つの手段とし、相手を限定せず、自分の意思の伝達を確実にできることで、地域での社会生活をより豊かに送ることができるように期待して活動に取り組んだ。

・ 実施期間

平成26年4月25日～平成27年1月30日

・ 実施者

熊井戸 佳之

・ 実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

○対象生徒は構音障害があり、慣れた相手との普段の会話であれば通じる場面が多いが、慣れた相手でも普段とは異なる内容の会話や同じ学校内でも普段接している教員以外は、話している内容が伝わりにくく、聞き取ってもらえなかった時には、何度も繰り返して相手に話すことがある。

○日常生活の中で円滑に言葉のやりとりをすることに困難を感じており、発音の練習をしている。iPadで文字の入力は可能である。かな入力が基本である。

・活動の具体的内容と事後の対象児の変化

○主に使用したアプリは「流暢タイプ」「VoiceR Pro」である。

○対象児は自立活動や国語や数学等の個別学習の授業などでは、事前に自分の課題を考え、今日の授業でどのような活動をするのか自分の案を考えて登校している実態がある。また、実施者の助言に基づいて、よい方向に自分で修正をしていくことが可能である。本実践では、対象児の主体的なコミュニケーションを促す観点から、本人の主体性を尊重しながら、取り組みを行った。

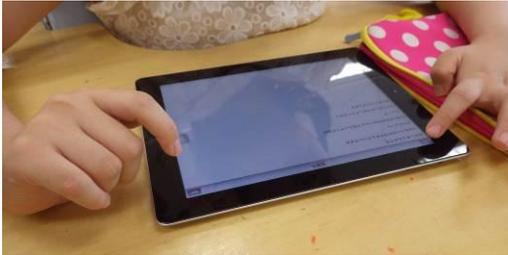
	取り組み	内容	変化
1	文字入力の評価  ↑文字入力の練習を行う様子	対象生徒が文字入力を行う際にどの程度の速さで入力できるかや入力の正確さについて評価を行った。	iPadの文字入力（かな入力）では5分間で34文字であり、パソコンのキーボードでの入力の2～3倍程度の時間がかかった。入力は正確に行うことができていた。
2	伝わりにくい言葉の分析	対象生徒がコミュニケーションの場面で伝わりにくい言葉の分析を対象生徒と教員との関わりの中からピックアップしていった。	対象生徒のコミュニケーションの様子を分析すると、構音障害から特定の言葉が伝わりにくい状況が分かった。サ行を含む言葉、促音や撥音を含む言葉、伸ばす音が入る言葉などである。 ＜伝わりにくい言葉の例：スムーズ、アセスメント、しんろこうわかい、しょうらい、はんこうきなど＞ 対象生徒は成長に伴い、体力もついてきているが、疲労をためやすい実態がある。本人の努力で口をはっきり動かすことで、ある程度聞きやすさを保つことができるが、疲労がたまっているときには、口の動きが少なくなり、相手にとって聞こえにくくなる状況があった。

3	<p>現場実習での使用</p>	<p>高等部3年生ということもあり、5日間の現場実習を行った。初めて現場実習を行う場所で、慣れない人に支援を依頼する場面も想定されるため、事前に本人にとって必要と思われる言葉や自分が話しにくい言葉を考え、流暢タイプに登録していった。</p> <p>＜登録した言葉の例：かばんをとってください。＞ など</p>	<p>現場実習では、障害のある方の支援に慣れた方が、支援員として関わってくださったので、iPadを使用しなくてもコミュニケーションをとることができた。</p>
4	<p>日常会話での使用</p>	<p>対象児はアプリ「流暢タイプ」を使って日常の会話の中で、他者が聞き取れなかった単語を入力して伝えることを行った。キーになる単語を入力することで、文脈から相手に会話の内容が伝わる。</p> <p>アプリ「流暢タイプ」は安価であること、本学園の母体校で使用実績があることから採用した。</p>	<p>対象児は他者が聞き取れなかったとき、以前より抵抗なくiPadを取り出して、単語を入力するようになった。対象児は会話の中で自分の話した言葉を相手が聞き取れなかったとき、まず似た意味の他の言葉に置き換えて話すことを行っている。それでも伝わらなかったときはiPadを使用するという流れを自分で考え行うようになった。また、自分からあらかじめ別の言葉に聞こえてしまう単語（例：せんたくもの、たくさんなど）を「流暢タイプ」に登録するようになった。</p>
5	<p>ボイスレコーダーアプリでの発音練習</p>  <p>↑ボイスレコーダーアプリを使用している様子</p>	<p>対象児がボイスレコーダーを使って、他者の聞き取れなかった単語の発音練習をできるようにした。使用したアプリは「VoiceR Pro」である。自分で練習が必要な言葉を録音して、練習を行った。</p>	<p>対象児は自分の発音を録音して、聞くということが初めてで、ボイスレコーダーに録音された自分の声に大変驚いていた。対象児は自分の聞いている声を他者が聞いている自分の声が違うことに気が付き、相手が自分の声をどのように聞いているか、フィードバックができるようになった。学習発表会の台詞の練習で使用し、伝わりやすくなっていることを実感できた様子だった。</p>

《iPad を日常会話で使用している様子》



↑ 教員や介護等体験の学生と iPad を使って会話している様子



↑ 「流畅タイプ」に使用する可能性のある語句を登録した



↑ 「流畅タイプ」の入力中の画面

(「へびろて (曲名)」と入力しようとしている)

【本実践を振り返って】

・活動当初

対象生徒は発音の不明瞭さを改善するために発音の練習を頑張っているため iPad は必要ないと考えており、教員の強い勧めで iPad を使用していた面があった。しかし、言葉のやり取りの中で、相手が聞き取れず、会話がスムーズにいかない場面があった。対象児本人も困難さを感じており、何回も同じ言葉を繰り返し話していた。魔法のワンドの活動を始めると iPad を取り出し、流畅タイプで相手が聞き取れない言葉を入力して伝える場面が見られるようになった。

・活動中盤から終了まで

○対象児と日頃から接している教員でも、対象児の話した単語が聞き取れないこと場面がある。iPad があることで、対象児の伝えるための最終的な手段となっていた。普段接している教員以外や外部の方が対象児とコミュニケーションをとるときには、聞き取れない言葉があると iPad の文字入力を手掛かりに会話が進んでいく様子が見られた。

○対象児と面談をしながら、コミュニケーションを中心に対象児が困難を感じていることを聞き取り、iPad をどのように使用していくかを決めていった。対象児との話し合いの中で、「発音の練習はこれまで通り、継続していくこと」「上手く相手に伝わらなかったときに iPad を使用すること。上手く伝われば iPad は使わなくてもよいこと」「口で話して伝えること、iPad で伝えることの両方をしていったらどうか」と伝えた。対象児はこれまで発音の練習をがんばっているのに、iPad を使うことで話せなくなってしまうのではないかと不安があったが、両方を使っていくということで安心したようである。将来は発音を良くして話して伝えたいという願いと iPad で他者に確実に伝わるという良さの両立ができるということに対象児が、気が付いたのが iPad を使用し始めた要因だと思われる。

・その他エピソード

対象児は「牛乳（ぎゅうにゅう）」という言葉がうまく言えず、家庭で練習をしていた。「ぎゅう」と「にゅう」の間に息継ぎを入れるなど、家族からアドバイスをもらい、相手に聞き取りやすくなってきていた。iPadのボイスレコーダーアプリを使用し、対象児の「ぎゅうにゅう」という発音を録音して聞いてみたところ、上手く言えていることを実感できた。

【今後に向けて】

対象児はiPadを1年間利用し、自分の言葉がうまく伝わらないときの対処法の1つを得ることができた。社会に出たときに、対象児の相手に伝えたいという気持ちをかなえる手段として、iPadの今後の活用が期待される。